二等當選歌

一、二、丙　辻　恒　彦

一 夫れ花いかに香るとも
いづれ一時の眺なれ
求めて長し三十年の
二 龍田の南樂園に
集ぶ友垣繁ければ
自治の小琴の音冴ねて
三 行くや行かずや立迷ふ
流轉の波に我が友の
月將たいかに匂ふとも
されば盡きせぬ眞理とを
光榮の思ひ出湧き來るも
集ふ健兒がひたすらに
浮世の塵を外に見つ
若き三年を誇るなり。
狹霧を罩し廣野原
そのかみ歌を浮べけん
白川今もしらじらと
四 今改造潮のすごく
混沌の樣爭へず
默示を悟る吾が胸に
五 南溟の雲凝り成して
剛毅木訥さながらの
地軸を搖るをたけびに
六 夢より淡き星屑の
消ゆ去り行けば三十の
いざや歌はん祝歌を
眞闇の中を走るかな
四海の岸を洗へども
さあれ蒼穹白日の
强き自覺の根ざし行く。
空を蔽ふかかの噴煙
姿尊き大阿蘇の
共鳴り響け吾が調べ。
紫匂ふ東雲に
記念の日こそ立返れ
躍る血汐に伴奏せつゝ。